名古屋女子大学　紀要　**44**（人・社）　61～71　1998

古保利古墳群の基礎的研究

―― 盟主墳の検討 ――

丸 山 竜 平

A Fundamental Study of Kobori Burial Mounds :

Examination of the Main Mound

Ryuhei MARUYAMA

は じ め に

およそ138基からなる古保利古墳群[1)]を、湖北地域におけるこの時代の歴史的研究の資料とするには、それぞれ個々にこれらの古墳についての解明を図る[2)]とともに、主要古墳つまり盟主もしくは首長と目される古墳が、どのような関係のもとに、どのように形成をみたのか、といったこの古墳群の構造の解明を果たさなければならない。すなわち古墳群にあっては、その支群、さらには小支群の抽出、ひいては群形成のメカニズムの解明である。ここでは前方後円墳を中心とする前方部付設古墳の、群中における位置関係を明らかとし、ひいてはその被葬者の身分的位置、築造の順位関係を明らかとしたい。いわば前方後円墳のこの地域における政治的位置を問い、被葬者像を描くために、①各古墳の特質と年代を解明し、②そこから古墳群の特質ひいては古墳被葬者の性格を探ることにある。元来は前方後方墳をも含めて検討をしなければならないが、ここでは紙数の都合で省いた。この点は改めて別稿で論及したい。

1．主要古墳の個別的検討

A．深谷古墳（A－1号墳、前方後円墳、全長35m）

(1)　立地の特徴

1）深谷古墳は琵琶湖、わけても塩津湾を意識して築造されたものであり、そのことと関連して、この西野山の主尾根筋から外れ、かつ高時川の左岸平野部からまったく望めない、といった特異な立地を選んでいる。ゆえに西野山古墳とは別支群として扱うべきである。

2）深谷古墳はいわゆる丘尾切断型の立地をとる。このため後円部裾の輪郭は明確で、幅3.8m隔てて背後の切断された尾根筋法面が迫る。いわば後円部の外観は幅広い堀切・空溝が巡る形状を呈する。この東上方に直線距離にしておよそ180m隔てて西野山古墳が所在することになる。西野山古墳もまた前方部側ではあるが、丘尾切断型であり、この古保利古墳群のなかで、明確な丘尾切断型をとるものは首長層墓のなかでもこの2古墳を除いて無い。それに最も近い形態をとる木戸越古墳とてさほど明確な尾根筋の切断は認められない。

深谷古墳が丘尾切断型によって築造されたのは、琵琶湖に面して、しかも湖上から真近に望見し得る、張り出した丘陵先端に占地したがゆえに、必然的に丘尾を切断することになったといえる。おなじことは西野山古墳についてもいえる。湖上から最大限に仰ぎ見せるための立地は、この尾根筋の傾斜変換点しかない。

図1．古保利古墳群位置図

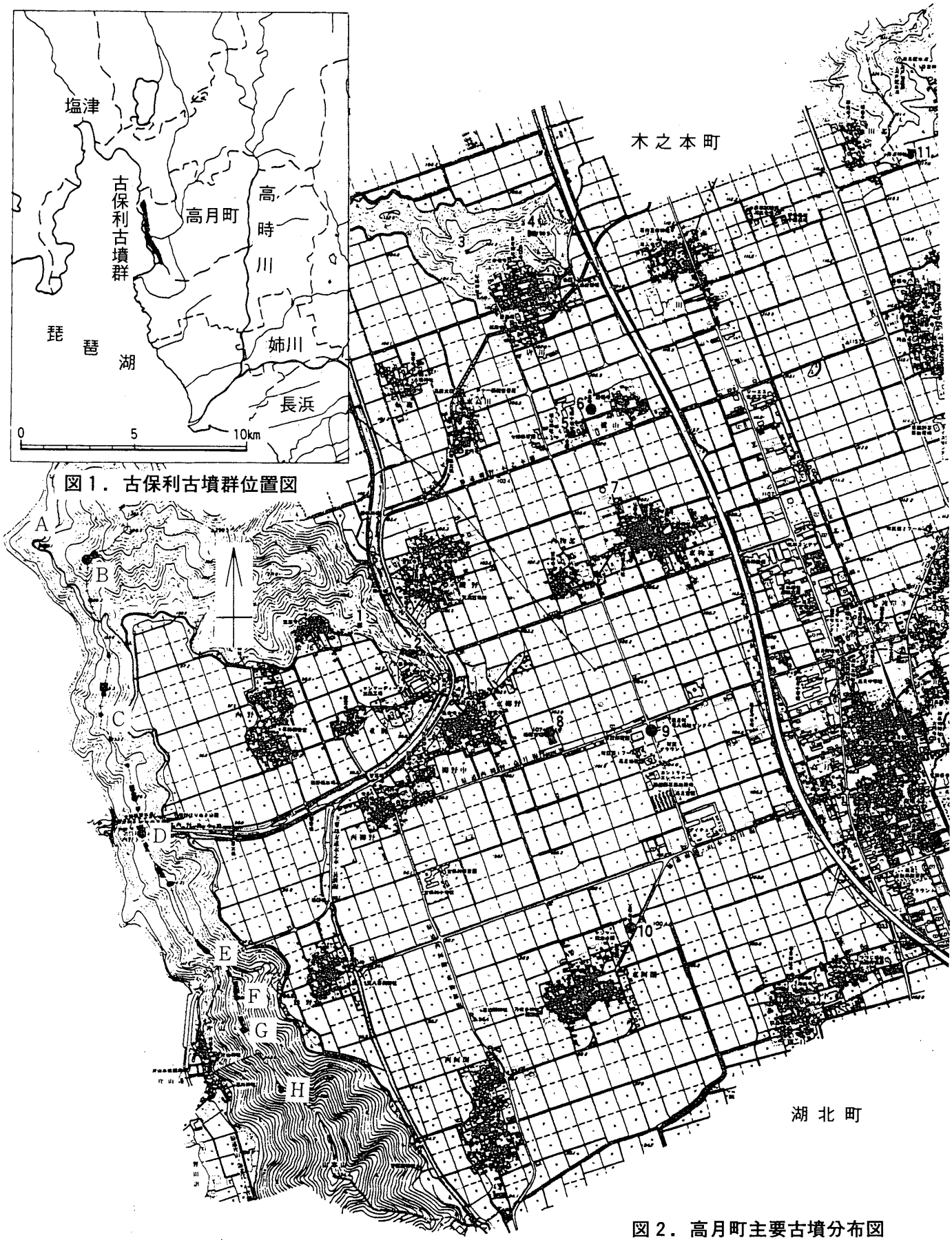

図2．高月町主要古墳分布図

3）この後円部堀切・空溝の中に、後円部と背後丘陵を接なぐ形で、あるいは、幅が広すぎるといったことからも、後円部に設営された方形張り出し（3.8×5.5m）との表現が適っているかもしれないが、およそ数十cmの高さにも満たない低基壇が存在する。どうやら上部全面に角礫ではあるが、石を葺いた痕跡が認められる。

(2) 墳形の特徴

さて、この古墳の墳形の特徴は、括れ部の幅が前方部先端幅に比して狭いことである。前方部先端幅16mに対して括れ部幅が8.5mを測る。括れ部幅の2倍に近いもので、前方部が先端に向かうに従い強く開くためで、バチ型前方部の部類に属することになる。これに対応して、括れ部の前方部墳頂も幅が極度に狭く、およそ2mほどに過ぎない。95年度の報告者が、箸墓のように開くと指摘したことに符合する。

全長35mの前方後円墳で、後円部径19m、前方部長さ16m、同墳頂部長さ12.5mを測るもので、前方部長が後円部径の4分の3に及ぶ（前方部長率0.84）前方部の長い正規の前方後円墳（A類）である。後円部径19mを6等分した数値、3.16mをもとにして前方部の比を求めると、およそ5（15.8mで20cmの誤差がでる）となる。前方部の広開率は、1.88（16m÷8.5m）で、前方部の高まり率は0.02である。

B．西野山古墳（B－1号墳、旧A－2号墳、前方後円墳、全長78m）

(1) 立地の特質

古保利古墳群中、深谷古墳とともに最北端に位置する。ゆえに、西野山の主尾根筋上での最北端の古墳となる。かつまた古保利古墳群中最大の規模を誇る古墳で、その全長は78mである。規模において後続する小松古墳（前方後方墳）の全長60mに18mほど大きいことから、また別表(1)からも他の古墳と比較してその大きさがうかがえよう。また、立地するところの高さも、標高240m前後を測り、山本山に近いところに位置する旭山古墳の246.5mに次ぐもので、ほとんど大差ないといってよい。いわばこの古墳群の中で最も高所に位置するものの一つである。

全長78mといえば、近隣では、長浜平野の背後丘陵に築かれた長浜茶臼山古墳が前方後円墳で全長92mを測り、これとの差は14mほどである。湖北においてはこれらに匹敵する古墳の発見はないので、いわば湖北地域でも最大級の古墳であるといってよい。

(2) 墳形の特徴

さて、古墳の墳丘は、後円部径63.5m、前方部長さ33.5m、括れ部幅20m、前方部先端幅28mを測り、墳頂部は後円部で径19.5m、前方部で長さ30.0m、括れ部幅で10m、前面先端幅で17mを示した。

前方部の長さはおよそ33.5mとなり、その前方部長率は0.52となる。後円部半径を少し上回るB類型に属する長さである。

また、前方先端部の広がりは、括れ部幅が20mであり、先端部幅が28mであることからその比は1.4であった。前方部が大きくは開かない形式であって、前期の様相を持つ。

前方部の高さは、背後の丘陵尾根筋上の堀切底からはわずか2.0m前後しかない。しかし、前方部側面では3.5m前後の墳丘斜面が通常の古墳のように認められることから、前方部前面の墳丘斜面が完結していない古墳として指摘し得る。類似する前方後円墳に木戸越古墳がある。また、これ以上に前面が明確で無いものに岩屋古墳（前方後円墳）が、また前方後方墳では屋ヶ谷古墳がある。

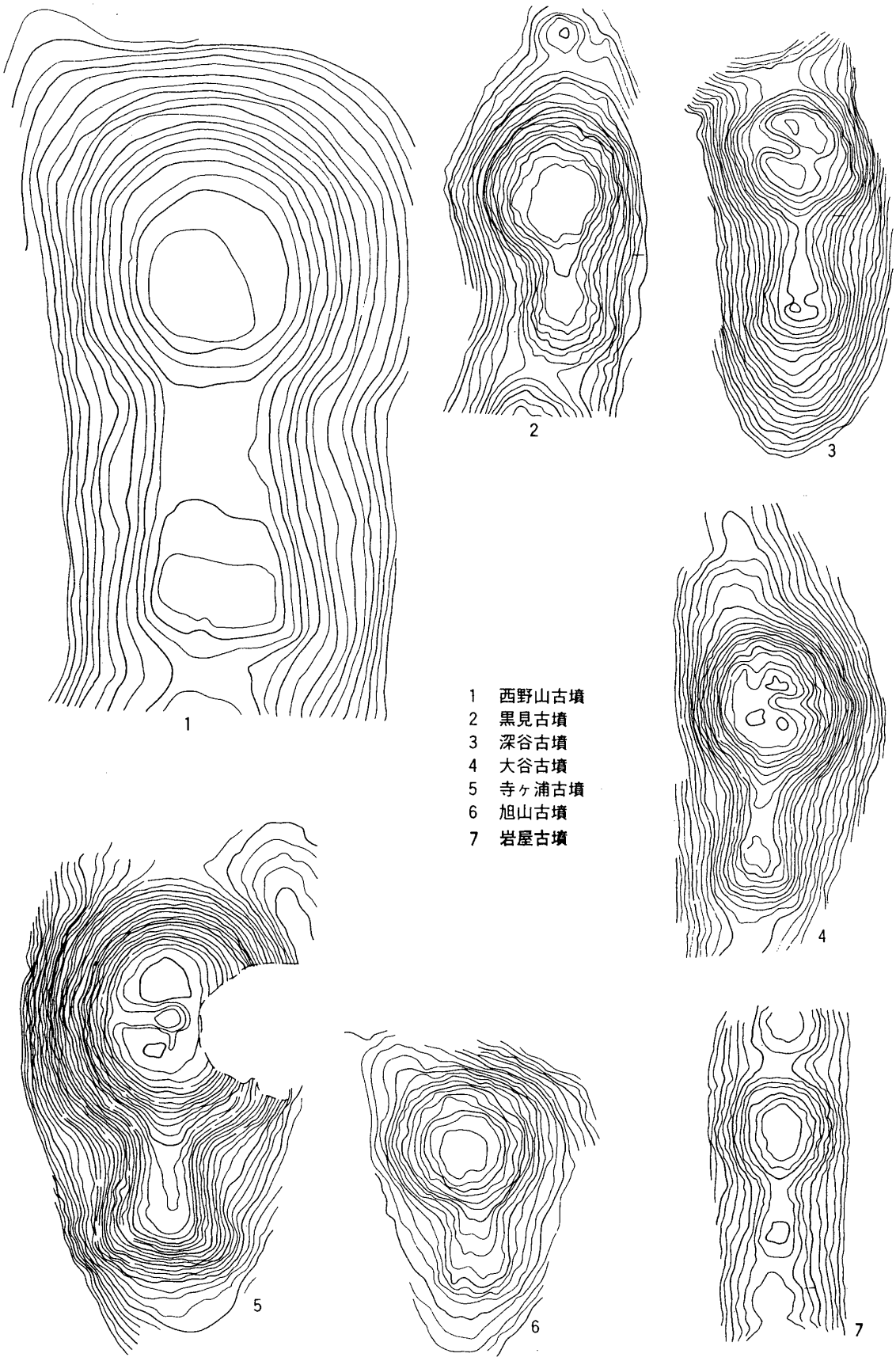

図3．古保利古墳群前方後円墳図

（『古保利古墳群』1995年　高月町教育委員会一部改変）

この前方部前面の尾根筋堀切部分の堀底幅はおよそ6.2m前後にすぎず、上幅で13.2mであった。この規模は、深谷古墳の後円部での下幅が3.8mで、上幅13.0m、また木戸越古墳の前方部での空溝の下幅が1.7mで、上幅6.3mであったことと比較すると、墳丘の大きさに比例して大規模である。この幅からいえば当初はこの部分の墳丘斜面も大きいものが予想されていたと想定し得る。全面墳高の高いものが当初計画されながら、墳丘の低いものに終わった経緯があったのか。

このように、本格的な前方部前面堀切の丘尾切断型は西野山古墳しかなく、後円部後方切断の丘尾切断型などを加えても３基しかない。しかもそれらはすべて群中の北半に認められる。そこには尾根筋との遮断、他古墳との隔絶の程度を意識しているかに思われる。

前方部先端の高まりは、括れ部上との比高差およそ１mほどであり、前方部墳頂長さおよそ30.0mからみれば僅かといってよい。その率は、0.033である。

ちなみに、深谷古墳では、前方部先端の高まりが括れ部墳頂からの比高差25cmで、前方部墳頂部長さが12.5mであることから、その高まり率は、0.02となり、西野山古墳よりも低い。

上田宏範氏の研究に基づいて前方後円墳の型式を求めると、後円部を６等分した長さが10.6mとなり、この数値を単位とすると前方部（ＣＤ間の長さ）は3.2となる。

つぎにＣＰは、14m前後となり、指数1.3となる。またＰＤは、15.1m前後で指数は1.5となる。つまり６対1.3対1.5の型式をとることが判明する。

類例は、奈良県崇神天皇陵古墳、同アンド塚、同南アンド塚、あるいは大阪府黄金塚古墳がそれで、千葉県竜角寺19号墳も同型式である。この古墳の年代もまたこれを目安にすることが可能であろう。

なお、後円部墳頂平坦部は径19.5mを測り、裾部径63.5mに対してその比は、0.31（墳頂平坦率）であった。この数値は、たとえば深谷古墳では0.58を示しており、墳頂部フラット面の相対的な大きさが、西野山古墳にまさることを示す。さらに黒見古墳では、0.6、岩屋古墳で0.48、また大谷古墳では0.49で、旭山古墳では0.59であった。黒見古墳がもっとも墳頂部フラット面が大きく、ひきつづいて後に深谷古墳と旭山古墳、そして岩屋古墳と大谷古墳がそれぞれ近似するものであった。西野山古墳はもっともフラット面の狭い岩屋古墳や大谷古墳よりなお狭いものであって、その相対的な編年観の位置が推し量ることができる。

Ｃ．木戸越古墳（Ｄ－17号墳、旧Ｄ－16・17号墳、全長33.10m、復元34m）

(1)　立地の特質

95年度『報告書』では、Ｂ支群中最南端に位置する方墳と円墳として別個に扱かわれている。ここでは新たにＤ支群とし、また前方後円墳とする。

古墳の立地は、他の多くの首長層墓が尾根筋の比較的高所高所に築かれ、目立つ位置にあるが、木戸越古墳はやや様相が異なる。つまりＤ支群の中心部分をなす尾根筋の高まりには小松古墳（前方後方墳）が築かれ、おなじく尾根筋上にはおおぶりの円墳・北木戸古墳・径22mや、ややおおぶりの方墳・７号墳・一辺16×14mなどが目に付く。これに対してこの木戸越古墳は南北方向の中心尾根筋が下降し東へ屈曲した一段低い箇所に築かれる。つまり、支群中では最高所に立地しないし、また中心尾根筋上の古墳群とは同一支群として扱ってよいのかどうか疑問視されるような、視角的に異なる位置を選んでいる。

しかもこの古墳の立地の特異さはこの後円部の背後の平坦部と関連するようである。この平坦部は木戸越古墳の後円部裾の形状からみても後世のものとは判じ難い。しかも注意されるべ

きことは、この平坦部に接して峠道である木戸越えの鞍部が取り付くことである。木戸越え（峠道・「木戸坂」）と平坦部、木戸越前方後円墳がセットとして存在したと考えることができる。

またこのことは平野部や湖上からの望見だけではなく、それぞれの峠道・墓道（港・津から平野部へあるいはその逆のコース上で）から間近に仰ぎ見ることの出来る位置が望まれたのではなかろうか。首長墓の立地を峠道との関係で求めるとすれば、首長の直接の経済的基盤である集落とのかかわりが問題となる。ゆえにその問題は首長墓の性格に関する問題へと発展していくのであり、これらの点についてはむすびにおいて再度論じたい。

(2)　墳形の特徴

前方部は、95年度『報告書』において、Ｂ－16号墳（現Ｄ－17号墳）と名付ける方墳で、その規模は一辺10ｍとする。またＤ－17号墳・旧Ｂ－17号墳・木戸越古墳は、円墳として扱われ、径21ｍ、墳頂部径９ｍを測る。しかし、方墳は北西の一辺を下幅1.7ｍ、上幅約6.3ｍと大きく堀切り、尾根筋を大きく遮断するようにして古墳裾部を形成する（一種の丘尾切断型である）。古墳の全長は後円部径20ｍに前方部長さ13.10ｍを加えて、およそ33.10ｍ前後となる。このため前方部の長さの比は、0.65となる。なお、前方部括れ部の墳頂部幅は4.1ｍ前後である。また、後円部の墳頂平坦部の径はおよそ７ｍとなり、その裁頭率は0.35である。

いま、後円部径20ｍを６等分して、3.33ｍを一単位とすると、前方部は3.93となり、ほぼ４となる。これに前方部墳長規模10.8ｍ、前方部先端裾幅19.5ｍ、同墳頂幅7.5ｍを考慮すると、全体の型式は６対３対３となる。

Ｄ．寺ヶ浦古墳（Ｆ－１号墳、旧Ｄ－１号墳、前方後円墳、全長52.5ｍ）

(1)　立地の特質

古保利古墳群のほぼ中央に位置し、Ｆ支群（旧Ｄ支群）の北端に所在する。北側のＥ支群とはおよそ60ｍほど隔たっているにすぎないが、その間の空域に茶屋道が下から通じる。すでに述べたように支群の領域区域の形成と峠道との強い関連がここでも伺われる。

その立地は尾根筋の最高所といったわけではなく、南続きの尾根筋に沿ってなお標高が増すといった特異な位置関係にある。

(2)　墳形の特徴

当古墳は前方後円墳ではあるが、後述のように前方部が短い。しかし、通有の「帆立貝式古墳」や「造り出しを持つ古墳」と呼ばれる程度のものではなくあきらかに前方後円墳の範疇に属するものである。

前方部の長さ18ｍに対して後円部径は35ｍあり、その比は0.51となる。後円部半径に匹敵する前方部長である。しかも、前方部をも含めて、墳丘の立面において隆々としたものであるところにこの古墳の特質がある。

全長52.5ｍのこの古墳の後円部は径37×35ｍを測り、これを６で均等割りするとおよそ６ｍとなる。これを前方部の長さ18ｍに対して、ＣＰ点とＰＤ点を求めると1.75と1.25の比率となる。

Ｅ．黒見古墳（Ｆ－44号墳、旧Ｄ－42号墳、前方後円墳、全長32.5ｍ）

(1)　立地の特質

Ｆ支群の南端部に位置し、Ｆ支群総数50基中南からは３基目となる。とくにその立地は尾根筋の南へ向けての傾斜変換点に相当しており、古墳立地の最適所であるので、45号墳に先行し

て、もちろん北に連接する北谷前方後方墳などにも先行して築かれたと想定され、その意味でも最南端の古墳であった。ゆえにこの支群形成の契機となった最初の古墳ではないかと考える。また、「大坂」・片山港への峠道に最も近い古墳として注目される。

(2) 墳形の特徴

前方部の長さ13.5mは、後円部径20mに対してその比0.68（前方部長率）となる。半径を越えるが4分の3以上に及ばないB類である。前方部の広開率（前方部先端幅÷括れ部幅）は、括れ部幅8mに対して前方部先端が幅13mとなるとすればその比は1.62である。この数値であると大谷古墳よりすこし広開率が高くなる程度である。

なお、後円部裾の径20mに対して後円墳頂部径は12mを測り、その裁頭率は0.60であった。

F．岩屋古墳（G－6号墳、旧E－5号墳、前方後円墳、旧前方後方墳、全長25m）

(1) 墳丘の特質

G支群総数21基中、北から6基目に相当する。なお、95年度『報告書』では墳形を前方後方墳とするが、ここでは前方後円墳とした。緩やかに傾斜する尾根筋の狭長な高まり部分の先端部傾斜変換点に立地し、その意味では好所なのであろうが、次に述べる同じ支群の大谷古墳とはものの比ではない。このことと次に述べるこの古墳の前方部先端の特徴とは不可分のものであろう。

(2) 墳形の特徴

後円部径13.5mに対して前方部は長さ10.5mを測り、後円部半径6.75mを遥かに凌駕する。前方部長指数0.78を示す典型的な前方後円墳である。

なお、その長い前方部であるが、括れ部幅6mに対して先端幅は9mを測り、柄鏡式とはいえない程度の少しの開きがあり、指数は1.5である。前方部墳頂面も平坦ではなく先端部でおよそ15cmほど高まる。この高まりはA類に属するもので、この古墳の年代の判定にもかかわる。この古墳を最も特徴付ける点は、前方部先端の堀切・空溝がほとんど明確ではないことである。後円部背後は墳頂との比高差が1.5mを測り、尾根筋から明確に墳丘高まりが観察できるが、前方部のそれは尾根筋上を25cm前後掘り切った程度で、明確な前方部の先端が要求されなかったが、果たせなかったことが窺われる。少なくとも後円部裾が前方部先端へ回るとすれば、さらに50cmはV字の切り込みが前面の地形と峻別するために必要であった。この曖昧な前方部先端をして、この古墳を典型的な前方後円墳から外すべきだと考える。

このような前方部の不明瞭な古墳は、前方後円墳に関していえば、この古保利古墳群中にはほかにない。しかし、前方後方墳については同じG支群中の屋ヶ谷古墳（G－15号墳、旧E－14号墳）の前方部がやはり明確な堀切・空溝の痕跡を示さず、あたかもこの屋ヶ谷古墳と対になって築造されたものではないかとさえ思われるほどである。

このようなことからこの古墳は、前方後円墳C類に属するものとする。

前方部の開きが少なく（広開率は先端幅9m÷括れ幅6m＝1.5である），前方部先端が顕著でないこと（高増率は前方墳頂部長さ7.5m÷括れ部墳頂からみた前方部先端の高さ15cm＝指数0.02）である。

G．大谷古墳（G－16号墳、旧E－15号墳、前方後円墳、全長38m）

(1) 立地の特質

さきの岩屋古墳と同じG支群（旧F支群）に属す。この支群は総数21基からなるので、南か

ら6基目となる。墳頂部の標高は237mを示しているので山本山山頂により近い。この支群の最南端を占めるG－21号墳（旧E－18号墳）の墳頂部236.25mよりなお若干高く、大谷古墳の立地が好所であったことを示す。先の岩屋古墳とは対称的である。

(2)　墳形の特徴

後部径24.5m、前方部長さ17mで、前方部の比率は、0.69である。後円部の4分の3には及ず、B類に属する。

前方部幅もほとんど開かず、括れ部幅6mに対して前方部先端幅は11mで、指数は1.83である。さきの岩屋古墳よりも先端部が開くものとなる。

また前方部の高まりは、括れ部から見ておよそ25cmに満たない低いもので、水平に近い。そして、前方部前面の高まり、つまり前面墳丘斜面の高まりは2m認められ、その前面の前方後方墳・屋ケ谷古墳とは墳丘裾を明確に画している。岩屋古墳がその前方部先端を明確に掘り切らず、尾根筋に連続する感を抱かせるのとは対称的である。

後円部を指数6として6等分すると4.1mとなり、前方部はCPがおよそ6.3mで指数は1.5、またPDは9.4mあり、指数2.3である。つまり6対1.5対2.3となる。

H．旭山古墳（H－1号墳、旧F－1号墳、前方後円墳E類・帆立貝式古墳B類、全長32.5m）

(1)　立地の特質

古保利古墳群中南から3基目にあたり、山本山の山頂に最も近い古墳の一つである。しかしなお、山頂からは距離にして560mほど隔たる。また、山本山山頂が324mであるから、旭山古墳基底部246.5mとは77.5mの落差がある。山頂寄りになお2基古墳があるが、最南端の古墳の一つといえる。また、尾根筋が一際隆起する部分へ立地しており、支群中の最好所である。なお、支群形成と尾根筋への取り付き道と関連しているが、かつてこの旭山古墳の上には片山神社があり、その参道が片山集落の背後から延びていたという。これをもって古墳時代の墓道というわけにはいかないが、あるいは、このことはこの古墳の被葬者と母集団との係わりを暗示するものかもしれないし、支群に対応しての山道の存在は無視し難い。ただ後円部付設区画が尾根筋の角度からだけではなく、東側を意識して築かれているとすれば、平野部とのかかわりも無視し難い。また、このような高所での築造こそ塩津湾と高時川流域平地部を意識してのものといえるかもしれない。さもなくば、聖地である山本山へ限りなく接近を試みたこの地域の支配者と評し得るのではなかろうか。

(2)　墳形の特徴

さて、この古墳は、後円部径22mに対して前方部は長さ10.5mを測り、その比はおよそ0.48である。前方部が後円部の半ばとみてよかろう。類例は寺ケ浦古墳の比数0.51である。

前方部の開き加減は、括れ部の幅が8mに対して先端幅が11mであるため0.73となる。ゆえこの古墳群中ではもっとも前方部の開かない古墳であることになる。

2．むすびにかえて　－政治的地域首長墓の抽出とその年代・性格－

ここでは全体的、もしくは個別的に気が付いた点を整理し、この首長墓解明の足掛かりとしたい。

(1)　前方部以外の付設方形区画

首長墓の要件は、前方部付設の円墳といった形態的、多分機能的特徴だけではなく、それ以外に方形の区画が伴うことであるようだ。ただしこの区画は前方後方墳や大型円墳で、立地か

ら見て首長クラスと目されるものにもうかがえる。具体的には1)西野山古墳の後円部西側及び南側に平坦部が認められる。2)小松古墳の後方部に接合する恰好でD－5号墳がある。この方形の張り出しは8.0×7.5mの規模である。3)黒見古墳の後円部南東側の張出し状遺構。その規模は4.5×9m前後である。4)大谷古墳の後円部南東に造り出した遺構。5)旭山古墳の後円部に造り出し状の遺構がある。6)木戸越古墳の後円部に付設して平坦部が認められる。深谷古墳のように裾端部に付設するものであるが、規模が3.8×5.5mと大規模で、かつ墳丘としての高まりではなく、尾根筋を削平して築いた区画である。7)なお、政治的地域首長墓とはみなし難いが、E・旧C支群の大型円墳・野瀬古墳も北北西に造り出しを持つ。

以上のように円墳を除外すると6基の古墳について類例が指摘し得る。しかし、それらは実に多様で、付設区画ではなく、別個の古墳かとさえ思われる明確なもの（A類・小松古墳、大谷古墳)、わずかな張り出し程度のもの（B類・旭山古墳、黒見古墳)、そして、山腹斜面をカットした平坦部を設ける程度のもの（C類・西野山古墳)、見過ごしかねない付設平坦部といったもの（D類・木戸越古墳、深谷古墳）と都合4類7基を数える。

さて、その存在意義についてであるが、a．正規の前方後円墳6基（A支群・深谷古墳、B支群・西野山古墳、D支群・木戸越古墳、F支群・黒見古墳、G支群・大谷古墳、H支群・旭山古墳）にはいずれも、必ず見出だせた。b．また、前方後円墳を含まない唯一の支群にも、尾根筋上のピークに築造された大型の野瀬円墳には造り出し様の地形が見出だせること。c．ゆえに各支群の最高首長墓には、かならず存在することから、首長にとってこの方形区画の存在は必須の要件であったのではないかと想定し得る。

(2) 立地と峠道の存在

上記首長墓は、必ずa）尾根筋の傾斜変換点、もしくはb）尾根筋のピークに築造される。そしてそれ以外に、鞍部や尾根筋の下位に築造されるといった特異なものがあるが、c）西野山を東西に跨ぐ峠道から視界の開けた箇所を占地するものがそれである。この点で尾根筋と峠道から解放されたのが西野山古墳であった。

表1

支群名	A	B	D	F	F	G	G	H
古墳名	深　谷	西野山	木戸越	寺ケ浦	黒　見	岩　屋	大　谷	旭　山
基底部海抜	156	240	155	171.0	200.0	222	233	246.5(246)
規　模	35.0	78.0	33.1	52.5	32.5	25.0	38.0	32.5
前方部長指数	0.84	0.55	0.66	0.51	0.68	0.78	0.69	0.48
前方部長類型(類)	A	A	A	B	B	A	A	C
前方高増率	0.02	0.034	0.17	－	－	0.02	0	－
前方部広開率	1.88	1.46	1.68	1.91	2.13	1.50	1.83	1.38
前方部前面高	1.5	2.0	2～1	3.0	1.25	0.25	1.75	0.75
後円部平坦率	0.58	0.31	0.35	0.48	0.60	0.49	0.49	0.60
主体部	不明	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
外表施設(葺石)	有	有	無	無	無	無	無	無
付設区画	有	有	(有)	無	有	無	有	有
型式	A	A	－	－	A	A	A	－

北から、「海老越」・阿曽津道、「木戸坂」・木戸越え、茶屋越え、「大坂」・片山への峠越えの４つが判明しており、他に片山集落の背後から尾根筋に至る２つの山道があって、都合６つの峠道が予想される。なお、この６つの山道がこの古墳群の支群を分けており、この山道が当時からの浜への道であり、墓道でもあったようだ。

しかも、この道が墓道だけではなく、交易上での幹線道であったことは、この支群形成の母体、つまりは首長居住の拠点集落を考える場合の重要な視点となる。浜（津・港）道、墓道との関連で評価したい。平野部を意識した古墳が多いが、いずれも琵琶湖との関わりでは切り離せないもののあったことが想定できる。

(3)　築造順位

前方部の長いＡ類に関して、その墳形の変遷を編年的に配列するならば、1)深谷古墳－前方部の括れ部幅が小さく、前方部先端がバチ型に開く。2)大谷古墳－深谷古墳の墳形の名残を止どめており、すこし前方部先端が開くが、括れ幅も狭い。3)岩屋古墳－前方部先端がさほど開かず、括れ部から全体的に少し開く。もはやバチ型の名残は無いと思われるが、先端部が明確ではない。さらに4)西野山古墳は前方部幅が先端へ向かって少し開いており、柄鏡式の名残はない。5)木戸越古墳は、前方部が拡がり、かつ墳頂部が先端に向かって高まりをみせることから、年代は下がるとみてよい。

つまり典型的な５基の前方後円墳は、Ａ－Ｇ－Ｇ－Ｂ－Ｄ支群といった順に変遷を辿ることが分かる。また、これにやや前方部が短い黒見古墳と旭山古墳を加えると、この２古墳の前方部がすでにバチ型に開かない、それでいて柄鏡式ではなく、すこし開きぎみの様相を示すことから、岩屋古墳の後で、西野山古墳に先行する位置を占め、黒見古墳－旭山古墳と変遷する。つまり、Ａ－Ｇ－Ｇ－Ｆ－Ｈ－Ｂ－Ｄの各支群を経た事が知れる。しかし、それも厳密にはＡ～Ｂまでは順次継起するもののＢ支群からＤ支群への変遷には大きな断絶がある。

(4)　政治的地域首長と前方後円墳

すでに述べてきたように、各支群には原則として前方後円墳は１基であって、このことからみて、その被葬者が政治的な地域首長であったと考えられる。しかし、Ｇ支群中には２基の前方後円墳を認め得る。しかし、厳密には岩屋古墳は前方後円形墳であって、前方後円墳ではない。それは、その前方部が明確に形成されていなかったからである。つまり同一支群中には前方後円墳は同時並存しないのであり、政治的地域首長墓としての最高の墳形である前方後円墳は、一世代に１基しか築かれなかったことをよく示している。

これをまとめると、Ａ支群・深谷古墳－Ｇ支群・大谷古墳－Ｆ支群・黒見古墳－Ｈ支群・旭山古墳－Ｂ支群・西野山古墳と５世代を重ねて政治的地域首長墓もしくは地域首長墓（前方後円墳Ｂ類はＡ類と区別し得ると考える）が営まれ、後幾世代かを経て後、Ｄ支群・木戸越古墳が営まれたことになる。

おそらく、前方後円墳築造の300年間のうちの、前期のおよそ100年間の間に、これら５基が世代を重ねて築造されたのである。

多数の古墳の分布現象は、古墳の具体的な築造を不明瞭なものとしてしまうが、深谷古墳の後に築造された大谷古墳は、その間およそ２㎞を隔てて築造されたことになる。また、大谷古墳に続く黒見古墳はその間およそ20ｍを隔てる。また黒見古墳と旭山古墳の間はおよそ150ｍである。そして旭山古墳から西野山古墳まではおよそ２㎞の距離を持つ。つまり、継起する首長の古墳とはいえ、その間はかなり隔たることが、このように築造順位を見ることによって気付かれよう。ここには、同一首長系譜のもとで誕生してきた首長・族長墓であるなら、もっと

近接した位置関係で、すなわち同一支群中で継起して築造されてしかるべきではないかといった疑問が呈示されるのである。つまり、広域内を移動する、ここにこの首長墓の築造選地に係わる特徴が指摘し得るのである。

【註】

1）高月町教育委員会『古保利古墳群－詳細分布調査報告書』(1995年３月)。本文中の古墳にかかわる数値は、西野山古墳、木戸越古墳を除いて、主として、この95年度『報告書』に依った。

2）『東海学園女子短期大学国文学科30周年記念論文集』(東海学園女子短期大学国語国文学会1998年３月刊行予定）において、個々の古墳の墳形について論述した。

〔付記〕小論作成に際しては、高月町教育委員会の黒坂秀樹氏には多くの教示を得た。また同町史編纂室宮澤義夫氏には西野山の山道について教示を得ることが出来た。今後構想を発展させたい。なお、番場の明日を考える会会員泉良之氏、見晴台考古資料館友の会会員形山壽嘉子氏、愛知学院大学院生深貝佳世氏、名古屋女子大学学生諸君ほか多くの方々に現地調査に際してご協力を得た。文末ながら芳名を記して感謝の気持ちにかえたい。